



NX-SDK

- [NX-SDK について \(1 ページ\)](#)
- [オンボックス \(ローカル\) アプリケーションについて \(2 ページ\)](#)
- [デフォルト Docker イメージ \(2 ページ\)](#)
- [NX-SDK に関する注意事項と制限事項 \(3 ページ\)](#)
- [NX-SDK2.0 について \(3 ページ\)](#)
- [NX-SDK2.5 について \(4 ページ\)](#)
- [リモート アプリケーションについて \(4 ページ\)](#)
- [NX-SDK セキュリティ \(5 ページ\)](#)
- [NX SDK 2.0 のセキュリティ プロファイル \(5 ページ\)](#)

NX-SDK について

Cisco NX-OS SDK (NX-SDK) は、自動化およびカスタム アプリケーションの作成 (カスタムの生成など) のためのインフラストラクチャへのアクセスを合理化する C++ 抽象化およびプラグイン ライブラリ レイヤです。

- CLI
- Syslog
- イベント マネージャとエラー マネージャ
- アプリケーション間通信
- ハイ アベイラビリティ (HA)
- ルート マネージャ

NX-SDK を使用したアプリケーション開発には、C++、Python、または Go を使用できます。

関連情報

Cisco NX-SDK の詳細については、次にアクセスしてください。

- [Cisco DevNet NX-SDK](#)。サポートされるリリースごとの機能と詳細については、`versions.md` リンク (<https://github.com/CiscoDevNet/NX-SDK/blob/master/versions.md>) を参照してください。

Go バインディングに関する考慮事項

Go バインディングは、NX-SDK のリリースと、アプリがローカルで実行されているかリモートで実行されているかに応じて、さまざまなレベルでサポートされます。

- NX-SDK リモート アプリケーションのすべてのバージョンの Go バインディングは、EFT 前の品質です。
- ローカル NX-SDK 2.0 アプリケーションの Go バインディングは、EFT 前です。
- ローカル NX-SDK 1.7.5 以前のアプリケーションの Go バインディングがサポートされています。

詳細については、「[NX-SDK アプリケーションの GO バインディング](#)」を参照してください。

オンボックス（ローカル）アプリケーションについて

オンボックス（ローカル）アプリケーションでは、NX-SDK をインストールし、選択したサポート対象言語でアプリケーションをビルドし、スイッチにインストールできる `.rpm` ファイルとしてアプリをパッケージ化し、スイッチにアプリケーションをインストールして実行します。 `.rpm` ファイルは手動で生成することも、自動生成することもできます。

アプリケーション開発は、NX-SDK が提供するコンテナで行われます。ローカルアプリケーションには、リモートアプリケーションとは異なるコンテナとツールを使用します。詳細については、[デフォルト Docker イメージ（2 ページ）](#) を参照してください。

ローカルアプリケーションのビルド、インストール、および実行については、[Cisco DevNet NX-SDK](#) を参照してください。

デフォルト Docker イメージ

NX-SDK には、ローカルまたはリモートで使用するための次の Docker イメージとツールがデフォルトで含まれています。

使用方法	目次
スイッチの場合	Cisco ENXOS SDK クロス コンパイル用の Wind River Linux (WRL) ツール チェーン 多言語バインディング ツールキット NX-SDK 1.75 以降、Go コンパイラ
オフ スイッチ (リモート)	事前にビルドされた libnxsdk.so を備えた NX-SDK 多言語バインディング ツールキット Go コンパイラ RapidJSON リモート API サポートのための gRPC

詳細については、<https://github.com/CiscoDevNet/NX-SDK#readme>を参照してください。

NX-SDK に関する注意事項と制限事項

NX-SDK には、アプリケーションをローカル (オンボックス) またはリモート (オフボックス) で実行するための使用上の注意事項と制限事項があります。

注意事項と制限事項については、[Cisco DevNet NX-SDK](#) の「役立つメモ」を参照してください。

NX-SDK2.0 について

NX-SDK バージョン 2.0 は、開発者が必要な場所でアプリケーションを実行できる実行環境の柔軟性を可能にします。このバージョンの NX-SDK では、アプリケーションは引き続きコンテナ内のスイッチをオフにして開発されますが、たとえばクラウドなどで、アプリケーションをスイッチ上またはスイッチ外のいずれかで実行できます。

NX-SDK 2.0 には次のような利点があります。

- スイッチをお客様の環境に簡単に統合できます。
- スイッチがデータセンター、パブリック クラウド、プライベート クラウドでシームレスに動作できるようにする拡張性。
- スイッチレベルのリソースでの変更がアプリケーションの変更または書き換えを必要としないように、スイッチ リソースから顧客アプリを切り離します。
- アプリケーションがリンクするための使いやすい API を備えた単一のライブラリ。これにより、スイッチの相互作用が簡素化され、アプリケーションをより簡単に記述およびデバッグできる高水準言語で記述できます。

- リモート サービスの実行は、オンボックス アプリケーションよりも安全です。

詳細については、https://github.com/CiscoDevNet/NX-SDK/blob/master/readmes/NXSDK_in_NXOS.mdを参照してください。

NX-SDK2.5 について

Cisco NX-OS Release 9.3(3) 以降では、ストリーミング Syslog 機能が追加されています。

詳細については、[CiscoDevNet](#)を参照してください。

表 1: *syslog* イベント

機能	詳細
syslog イベント	<ul style="list-style-type: none"> • Cisco NX-OS syslog イベントに登録するカスタム アプリケーション向けの機能です。 • 詳細については、nx_trace.h の watchSyslog および postSyslogCb API を参照してください。

リモート アプリケーションについて

リモート アプリケーションは、Cisco Nexus スイッチではない別のスイッチに置くことができます。リモートまたはオフボックスのアプリケーションは、NX-SDK レイヤを介して呼び出し、スイッチと対話して情報の読み取り（取得）または情報の書き込み（設定）をします。

ローカルとリモートの両方の NX-SDK アプリケーションは同じ API を使用するため、NX-SDK アプリケーションをオンボックスまたはオフボックスで柔軟に展開できます。

リモートで実行するには、アプリケーションが特定の要件を満たしている必要があります。詳細については、https://github.com/CiscoDevNet/NX-SDK/blob/master/readmes/NXSDK_in_NXOS.mdを参照してください。

2.0 より前の NX-SDK アプリケーションの後方互換性

NX-SDK 2.0 には、NX-SDK v1.75 アプリケーションの開発方法に応じて、条件付きの後方互換性があります。

- 通常、NX-SDK は、NX-SDK 2.0 より前に作成したアプリのリモート実行をサポートしており、アプリを完全に書き直す必要はありません。代わりに、API 呼び出しを変更するために変更せずに、同じアプリを再利用できます。新しい NX-SDK 2.0 モデルで古いアプリをサポートするには、API 呼び出しで IP およびポートのパラメータを提供する必要があります。

ます。これらのパラメータは NX-SDK 1.75 以前では使用できませんが、アプリが SDK サーバにエクスポートできる環境変数として IP アドレスとポート情報を追加できます。

- ただし、NX-SDK 2.0 より前のアプリの下位互換性がサポートされていない場合があります。古いアプリの一部の API は、リモートでの実行をサポートしていないか、実行できない可能性があります。この場合、API は例外をスローできます。元のアプリケーションに対する例外処理の完全性と堅牢性によっては、アプリケーションが予期しない動作をする可能性があります、最悪の場合、クラッシュする可能性があります。

詳細については、https://github.com/CiscoDevNet/NX-SDK/blob/master/readmes/NXSDK_in_NXOS.md を参照してください。

NX-SDK セキュリティ

NX-OS 9.3 (1) 以降、NX-SDK 2.0 は次のセキュリティ機能をサポートしています。

- セッションセキュリティ。リモートアプリケーションは、トランスポート レイヤー サービス (TLS) を介してスイッチ上の NX SDK サーバに接続し、アプリケーションとスイッチの NX SDK サーバ間に暗号化されたセッションを提供できます。
- サーバ証明書のセキュリティ。Cisco NX-OS 9.3 (1) を使用した新しいスイッチ展開の場合、NX-SDK サーバは 1 日限りの一時証明書を生成して、カスタム証明書をインストールするのに十分な時間を提供します。

たとえば、以前の NX-SDK バージョンから NX-SDK 2.0 にアップグレードする場合など、NX-SDK サーバにカスタム証明書がすでにインストールされている場合、既存の証明書はアップグレード後も保持され、使用されます。

- API 書き込み呼び出し制御。NX-SDK 2.0 では、セキュリティ プロファイルが導入されています。これにより、アプリケーションが NX-SDK サーバをどの程度制御できるかを制御するための事前定義されたポリシーを選択できます。セキュリティ プロファイルに関する詳細情報を入手するには、[NX SDK 2.0 のセキュリティ プロファイル \(5 ページ\)](#) を参照します。

NX SDK 2.0 のセキュリティ プロファイル

以前のリリースでは、SDK バージョン 1.75 の API は、イベントのデータの読み取りと取得のみが許可されていました。Cisco NX-OS リリース 9.3(1) 以降、NX-SDK 2.0 は書き込みコールを含むさまざまなタイプの操作をサポートします。

アプリがスイッチを読み書きする機能は、セキュリティ プロファイルを介して制御できます。セキュリティ プロファイルは、スイッチで実行されているアプリケーションのサービスに付加されるオプションのオブジェクトです。セキュリティ プロファイルは、スイッチに書き込むアプリケーションの機能を制御し、スイッチ機能を変更、削除、または構成するアプリケーションの機能を制御します。デフォルトでは、アプリケーションの書き込みは許可されていない

め、アプリケーションごとに、スイッチへの書き込みアクセスを有効にするセキュリティプロファイルを作成する必要があります。

Cisco の NX-SDK は、次のセキュリティ プロファイルを提供します。

プロファイル	説明	値
拒否	CLI の追加を除き、API 呼び出しがスイッチに書き込まれないようにします。	これはデフォルト プロファイルです。
スロットル	スイッチを変更する API を許可しますが、指定された数の呼び出しまでのみ許可します。このセキュリティ プロファイルは、スロットリングを適用して API 呼び出しの数を制御します。 アプリケーションは制限まで書き込むことができますが、制限を超えると書き込みが停止し、応答でエラーメッセージが送信されます。	スロットルは 50 回の API 呼び出しであり、スロットルは 5 秒後にリセットされます。
許可	スイッチを変更する API は制限なしで許可されます	

NX-SDK のセキュリティ プロファイルの詳細については、[\[NX-SDK アプリケーションのセキュリティ プロファイル \(Security Profiles for NX-SDK Applications\)\]](#) を参照してください。

アプリケーションの構築、インストール、および実行の詳細については、[CiscoDevNetNX-SDK](#) にアクセスしてください。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。